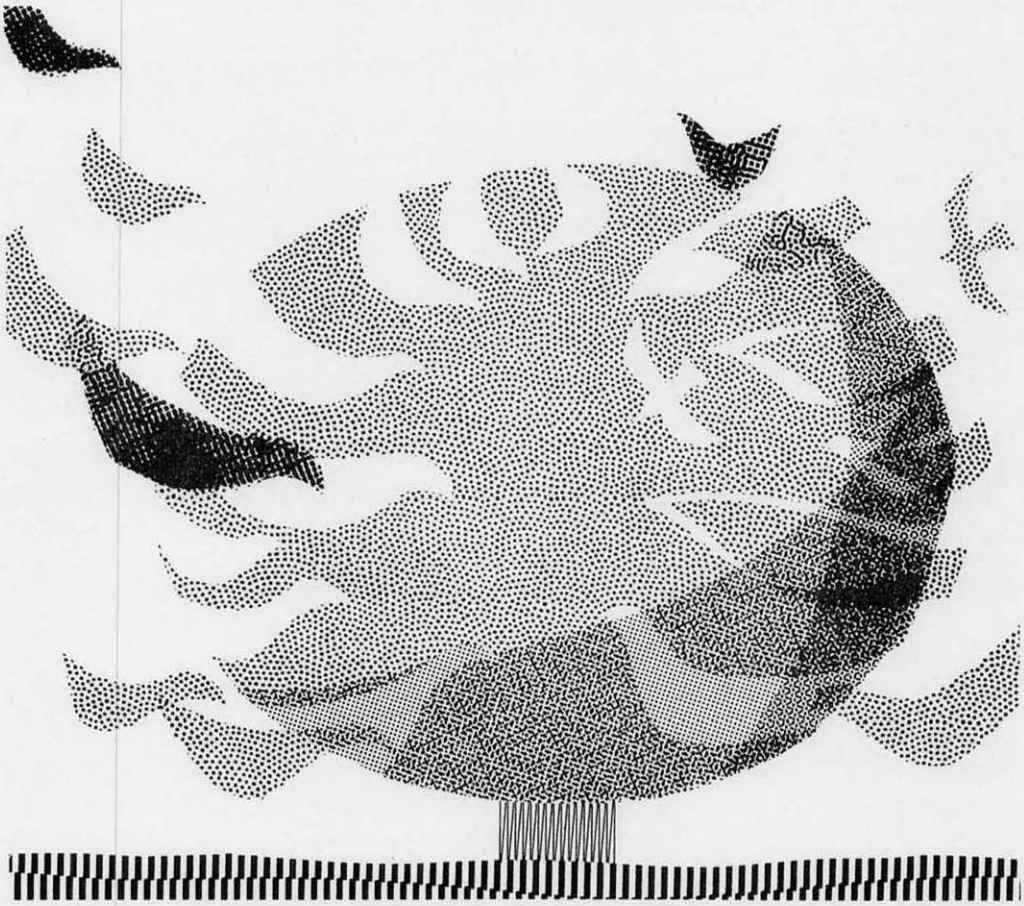
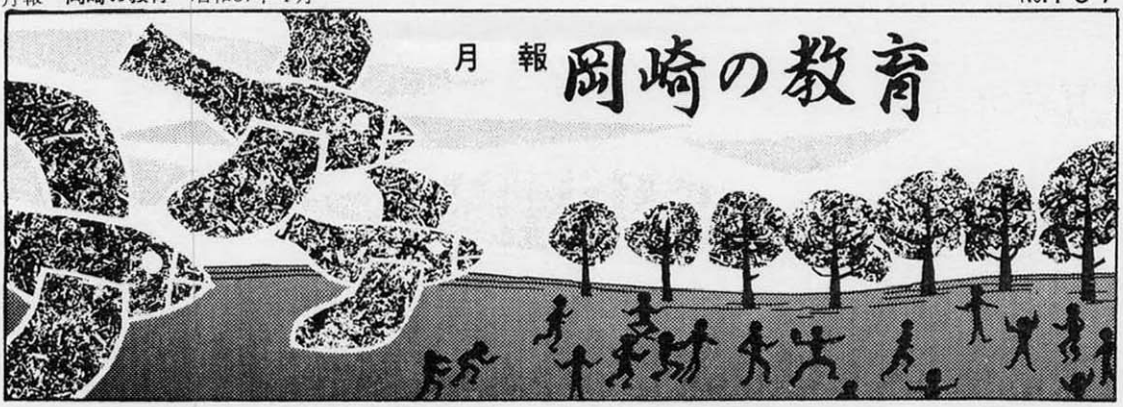
月報 岡崎の教育

57 年度 No.107～118



岡崎市教育委員会



4 月 号

陽春の陽差しを浴びて
二階建ての体育館が輝く

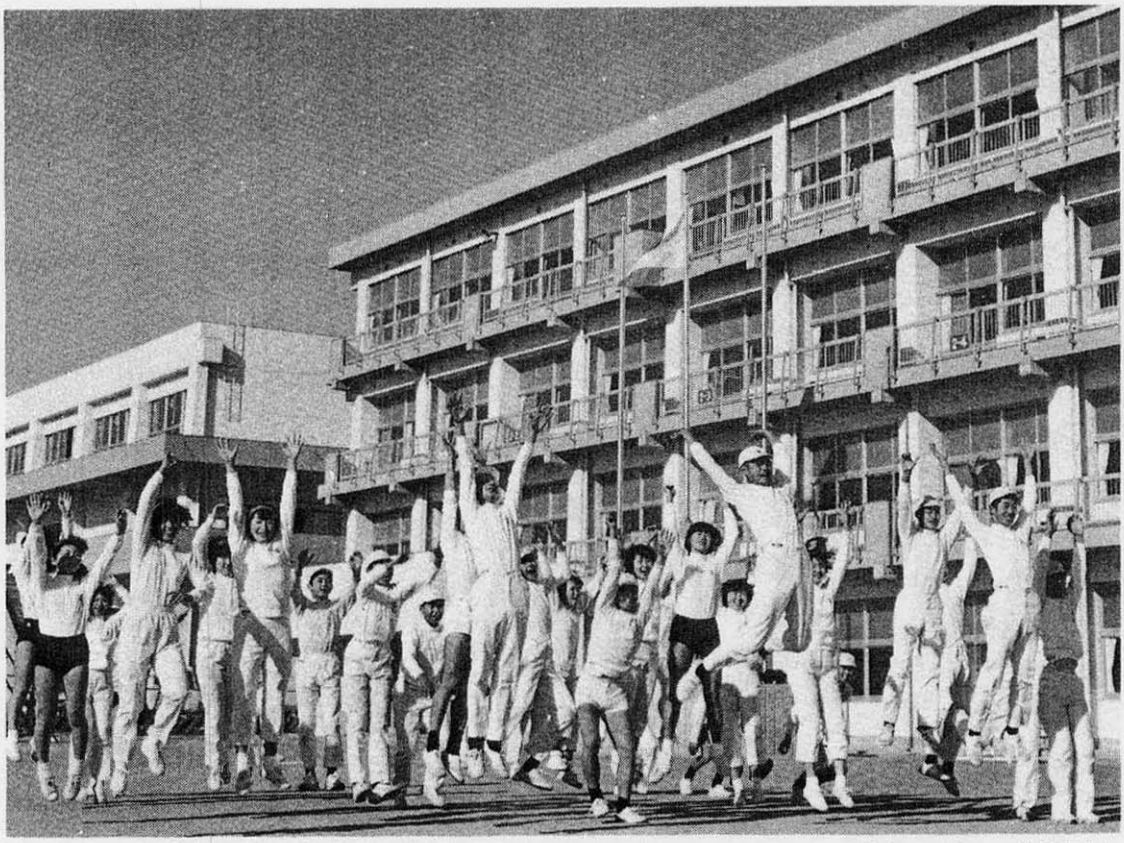
「バンザイ」
思わず駆け出す　跳びあがる
どの顔も喜びにあふれている
待望の体育館の完成だ

開校から一年
新しい歴史を　伝統を
ぼくらの手で造りあげる

建設の槌音は
今日も高らかに鳴り響く
夏にはプールも完成だ

さあみんな笑顔で
心と体を鍛え
新しい一歩を踏み出そう

昭和57年４月１日
編集／発行
岡崎市教育委員会

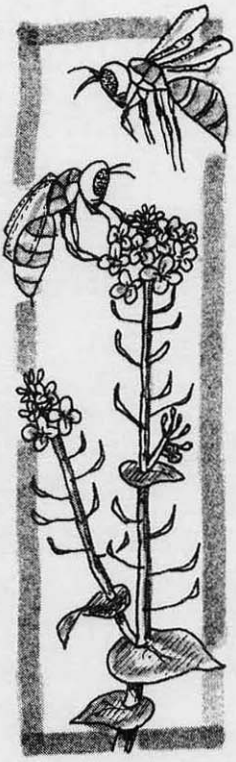


（開校から一年　― 矢作北中）

—教育随想—

上杉謙信の家訓に想う

高橋　録太郎



最近、各方面から家庭教育の見直しが叫ばれてきた。ここに上杉謙信の家訓を取りあげ、愚見をのべてみたいと思う。

心に驕りなき時は人を敬う

この頃、神仏や人間や物に対する敬虔の念が薄れ、反面、高慢な人間が多くなったように思う。青少年の突っ張りや金力や権力による傲慢が良心を麻痺させ、自ら墓穴を堀って自己を崩壊に導いた例はよく見るところである。〝自慢高慢馬鹿の中〟とか〝驕る平家は久しからず〟とはこの辺を戒めたものである。お互いに自戒して、互譲と敬愛の精神をもって身を処するならば必ずや平和で幸福な共存共栄の世界は生まれるのである。

心に邪見なき時は人を畏れず

この頃の人間は、小利口になって、世間の目をおそれ、右顧左眄して、自己の所信を貫行する勇気に欠ける場合がある。邪見を捨て、正見を得て〝断じて行えば鬼神もこれを避く〟の精神をもって進みたいものである。孟子は〝自ら省て縮（なお）くんば千万人と雖も我往かん〟と。また、西郷隆盛は〝人間を相手にせよ。天を相手にして己を尽し、人をとがめず、わが誠の足らざるを尋ぬべし〟と教えている。

心に怒りなき時は言葉和かなり

怒る心をおさえてなごやかな言葉をもって人に接することは人間として大切なことである。つい感情に走り、かっと怒ってしまい、後悔することはよくあることである。ピタゴラスは〝怒りは無謀をもって始まり、後悔に終わるもの〟家康公は、〝怒りは敵と思え〟とさとした。古人は〝怒れる時は十度数えよ。怒り甚だしくば百度数えよ〟と。また英国の諺は〝怒ることを知らないのは愚かである。しかし、怒ることを知ってよく忍ぶ者は賢い〟と教えている。

心に孝行ある時は忠節厚し

孝は百行の基といわれたように、家庭において孝心を養っておけば主への忠節心が厚くなると教えたものである。これを角度をかえてみれば、家庭で正しい人間関係が培われておれば、学校、社会、職場においても正しい人間関係が生ずるようになり、延ては、正しい国際理解にも発展することが出来るのである。ペスタロッチーは〝家庭よ、汝は道徳の学校なり〟と喝破している。

心に自慢なき時は人の善を知る

とかく人は、他人の欠点はよく目につくが、美点には気がつかず、自分のことは誇張したがるものである。人間は、それぞれ短所欠点を持っているが、美点も持っている。お互いに自己の足らざるを知り、己を空しうして、謙虚に他人の美点を学びとりたいものである。〝自慢は知恵の行きどまり〟といわれるように、うぬぼれを捨て、他人の善美を取り入れ、自己成長の糧としたいものである。英諺に曰く〝賢者は自ら何も知らずと知り、愚者は一切を知ると考える〟と。

心に迷いなき時は人をとがめず

〝迷えば凡夫、悟れば仏〟〝迷わぬ者に悟りなし〟ということばがある。人間はみな凡夫、多くの迷いの中から正しいもの発見して、より高い悟りの世界へと近づく。迷いを去って真知を得れば、人をとがめないばかりでなく、他人をも限りなく愛することができる。塩不足に困っていた信玄に塩を送った謙信こそ〝汝らの敵を愛し、汝を責める者の為に祈れ〟との聖書の教えを実行した人である。

（岡崎読書会会長）

ワインと水と

平野　有行

洋式トイレに慣れた。むしろ近ごろでは、心地よいぐらい。洋式バスも旅行で時々利用する。肉も好きだ。それほど問題ないと思っていたヨーロッパ旅行も、飲料水には困った。ホテルでの朝食、レストランでの昼食、そして夜食と、いつでもウオーターが出ない。金を出せば飲めるが、ワインやビールよりも高い。しかもまずい。三度三度の肉料理、水けがないと、のどを通りにくい。やむを得ずワインやビールを飲む。やはり、ドイツビールはさわやか。ムーランルージュでのワインは、また格別。

しかし、水はほしい。習性というものか。二・三回入った日本料理店で水が出されると、ほっとする。

こうしてみると、日本人はよく水を飲み、使う。至る所で、あらゆる機会に。習慣とは恐ろしいものだ。たとえエスカレートしていても、ごく当たり前のように思える。このことは、何も水だけではない。外に出てみると、日本の生活の豊

—ふるさとの山河—

矢作川 (1)

母なる川

矢作川の源流は中央アルプスの大川入山（一九〇八M）で、三河湾の河口まで延長百二十二キロ、流域面積は千八百三十平方キロである。また、矢作川水系は本川を軸に大小の支川三十、枝川六十三からなり、見事な樹枝状水系網をつくっている。その各流域には大小無数の集落が立地し、生活、農漁業、工業用水等の水資源を供給し、生活にうるおいを与えているのである。

「矢作川は母なる川であるとして、情操的陶冶にも、また理科、社会の生態系の中でも理性的に理解されることが、現在ほど必要なときはないと思う。」（愛知教育大学名誉教授　伊藤郷平氏）

情操的という意味は「水は金で買う物以上のもの、人間を支える自然そのもの」ということであり、理性的という意味は「西三河十九市町村に住む二十六万世帯百八万人の生命を支えている」ということである。

この提言をうけて、中学校三年社会科において「矢作川とその流域の人々」という単元を設定し、中学校社会科学習の最終総合段階として、次のように構成したことがある。

〈オリエンテーションの学習・四時間〉
- 矢作川水系の概括把握
- 矢作川のフィールドワーク（衛生センター附近、真宮遺跡、三龍社と明神渡船跡）
- 問題づくりと追究計画の作成

〈個人追究・三時間・夏休み〉
- 聞きとり調査や文献調査
- 調査内容のまとめ

〈全体追究・八時間〉
- 追究視点別による発表討論
- 新たな問題の追究
- 西三河における矢作川の役割

〈発展的個人追究・二時間〉
- 発展的な追究問題の設定と再調査
- レポートづくり

この学習を通して、生徒たちのだれもが矢作川を生活圏の中でとらえなおすことができた。

「私たち人間の生活と水とは切っても切れないものなのに、今まで私は水のことなど考えたこともなかった。（中略）あの矢作川がこんなに多くの役割を果たしているなんて、ただただ驚きであり、まだ信じられない。まさに矢作川は西三河の至宝である。この学習を通して矢作川により近づけたような気がする。これからは流域市町村が一つになって将来を考えていく必要があると思った。」（女）

今月号から一年間、この母なる川が「ふるさとの山河」に連載される。紙面を通して矢作川再見につながればと思う。

（竜海中・梶尾長夫）

第一矢作ダム

かさが、膚で感じられる。

また、行くかな。日本の豊かさを探るために。

（細川小）

スイミングキャンプ

杉山裕美

大きな体！

完璧な設備！

これが『世界最強』と言われるアメリカミッションビエホスイミングを訪問した時の第一印象である。

初めは、世界記録保持者であるシンシアウッドヘッドやジェシーバサヨなどのナショナルチームの豪快な泳ぎに、ただただ圧倒されるばかりであった。

今回、このスイミングキャンプでは一つでも多くの事を学ぼうと約二週間、十三才の少年の家にお世話になり生活を共にした。驚いた事に、学校のある日は朝五時から練習をするのだが、四時半頃になると必ず一人で起きて来る。また、久し振りに練習が午前中で終わった時など、午後はずっと家の手伝いをすると言った具合である。

『自分のために水泳をやっている』

『家族には迷惑をかけない』

この二点が徹底されているのには驚いた。たった十三才、十四才の子が真剣なのである。朝五時から夜七時迄の水泳生活、これが毎日続くのだから真剣でなければできない。頑張れ、日本の少年達！

（竜海中）

岡崎再見

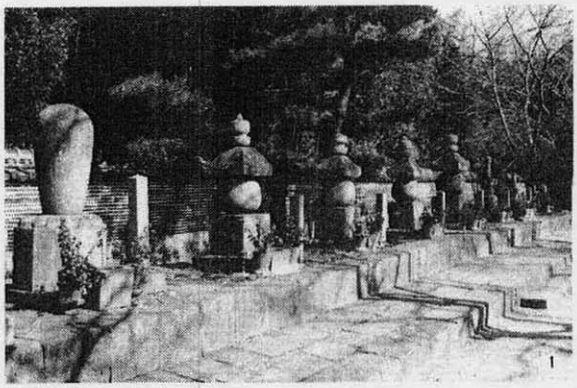
㉟ 松平八代

「三河武士の館（家康館）」完成を前にして、家康の祖父「松平八代」のゆかりの地を訪ねてみた。

江戸幕府の開創者、征夷大将軍としての徳川家康の業跡と栄光の陰に、家康を生み、育てた父祖達の長い歴史は忘れ去られる傾向が強い。

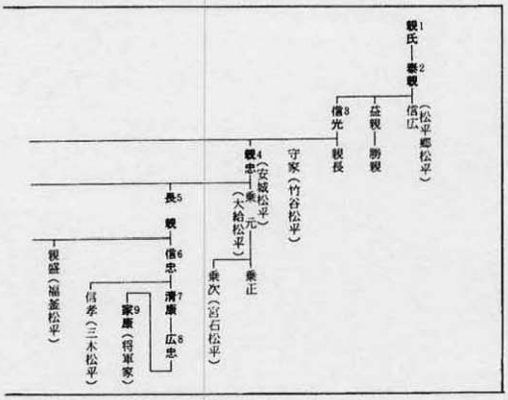
松平郷を起点に、史料を頼りにして、松平八代二〇〇年の歴史の跡を取材する中で、松平郷城山から西三河平野への進出を図った初代親氏の雄志を感じ、井田野の千人塚跡の悲惨な死闘を偲び、度重なる一族分裂の危機を克服して、戦国大名化への歩みを続けた松平家臣団の苦難と忍従の道の厳しさを知る。

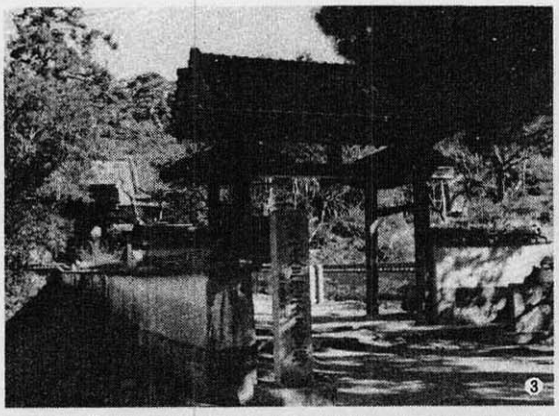
松平家菩提寺大樹寺墓地の奥に、松平八代の墓が並んでいた。陽光の中、カメラマンの指に吹く風は冷たかった。



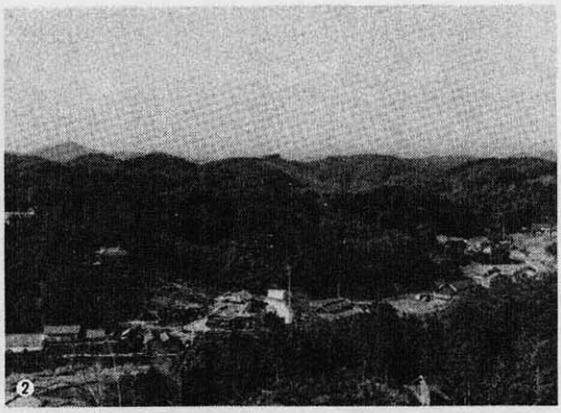
1

松平一族系譜



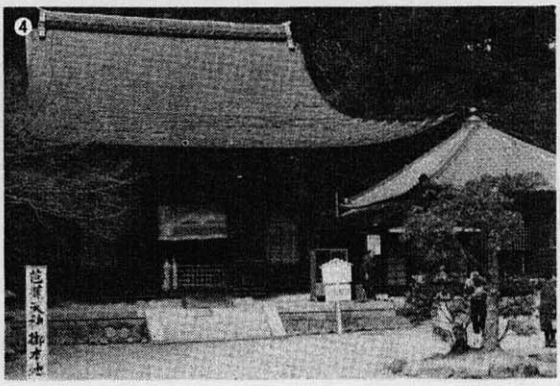


3

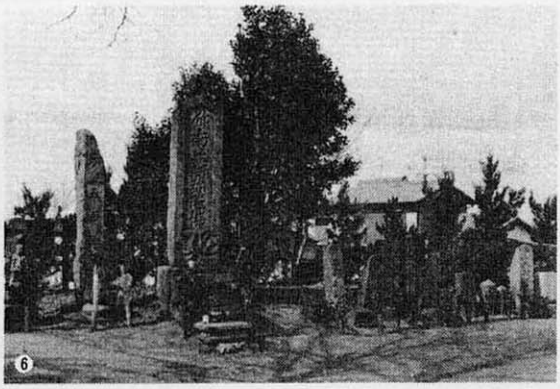


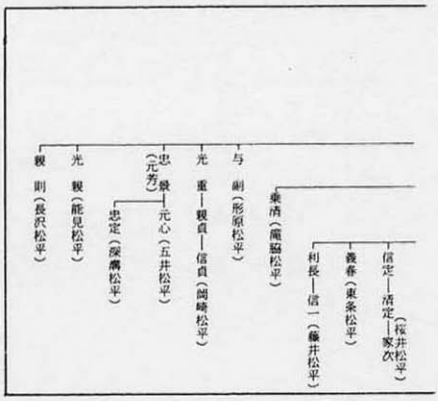
2

5

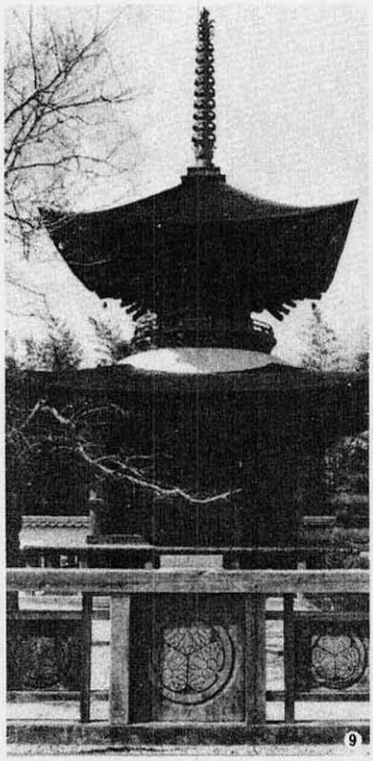


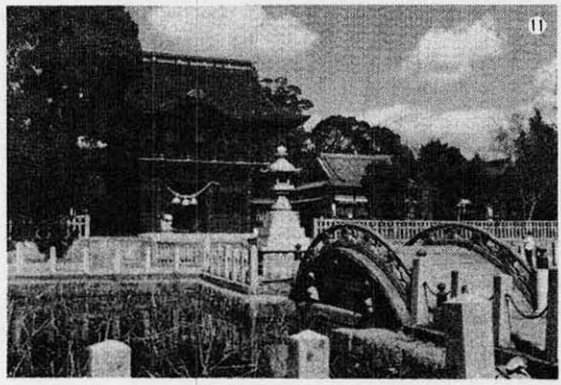
4





①大樹寺に眠る松平八代の墓
②松平城趾から望む松平郷
③初代親氏創建といわれる高月院
④三代信光創建の信光明寺
⑤信光明寺にある親氏・泰親・信光の墓
⑥親忠・長親時代の激戦地、井田野にまつられている千人塚
⑦八代広忠を弔う松応寺
⑧松応寺境内に建つ広忠公追資碑
⑨七代清康の建立による大樹寺の境内の多宝塔
⑩四代親忠の建立による菩提寺の大樹寺
⑪親忠が伊賀の国甲賀から位（井）賀の郷に勧請したといわれる伊賀八幡宮





教育日々

昼間の星の観察

奥殿小　尾藤　広行

冬休み、夜になるとカメラと三脚を手にして家の屋根に登っていた。理科の授業「星とその動き」のためのスライドを撮るためである。

冬の夜空の王様オリオン座をはじめとしてカシオペア座・北斗七星・北極星等を時には零時過ぎまで寒さにこごえながら撮影した。そのフィルムの現像ができ映写した時のうれしかったこと。

さっそく二学期に入って理科の授業で使ってみた。理科室で昼間の星の観察である。子どもたちは一様に驚きの声。普段なにげなくながめていた星々、そのすばらしさに気づいたようである。

案の定、子どもたちは放課になると図書館から星の本をひっぱりだし、一所懸命読んでいた。

「先生、星って色があるんだね。」そんな声を聞かされるとうれしくてたまらなかった。

三時間露出させて線を引いたように見えるオリオン座。

「あっ、オリオン座だ。」

弧を描いた北の星々。

「どうして円になるんだろ。」

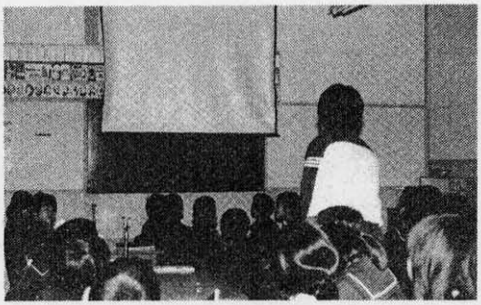
子どもたちは期待に応え、次々に疑問をなげかける。

先生がとってきたスライドで星の名前をいう時、たのしみにまっていた。夜さがすとき首がいたくなったりしたけど星がみえなかったりすると、とてもつまらなかった。毎日星を見るのがたのしみだった。いろいろなスライドがとてもきれいでおもしろかった。先生は星のことをよく知っていると思った。

以上が「星とその動き」を終えた時の子どもの感想である。

「星とその動き」の授業のために撮ったスライド五本百枚。その何分の一かを使用したにすぎなかったが、その何倍も何倍にもなってかえってきた。

いかに子どもたちに興味を持たせるか。自作スライドを見せることで達成できたように思う。



一人前の一年生

常磐東小　宮下富士子

桜のつぼみもかたい山の四月はじめ、たった九名の一年生を迎えた。

ふつうの教室の三分の二ほどの広さの教室。九人分の机だけでは、もったいないほど広すぎる。机、こしかけ、かさたてなど、入学児の名札貼りも、一時間あれば充分終わる。終わった頃には、名前は言うに及ばず、名簿順まで覚えてしまう。

九名の入学児は、一列に並び校長先生に一人ずつ握手をしてもらい、もう名前も顔も知っている三十九名の上級生に拍手で迎えられる。

翌日からは、放課になると六年生も一年生も一緒に竹馬に乗って遊ぶ。始めての一年生は、五、六年にささえられ、教えてもらう。

本校では、わざわざ「たて割班」を作らなくても、横の人数が少ないため、必然的にたて割になってしまう。

「ゆとりの時間」に畑作りが始まる。高学年が草を刈り耕す。低学年は草とりを受け持つ。全校そろってじゃがいもを植える。一年生も一人五個ずつ植える。六年生がマンツーマンで植え方を教える。

しいたけ栽培では「菌打ち作業」で、通学団別に班になり、一年生も作業の仲間入りをする。

「何でも全校で」という小規模校の特性から、六年は自然に低学年をいたわり、教える。この一年生も高学年になれば、活動の中心になって後輩達に教えるようになるだろう。今のうちに上級生から何でも吸収しておかなくてはならない。

児童会の選挙権までもらえる本校の一年生。一年生でも、あたりまえのように六年生と遊び、あたりまえのように仕事が受け持たされる。入学したての一年生でも、本当に一人前の小学生なのである。

（四月一日より細川小勤務）

おしらせ

昭和五十七年度 学校経営の視点

児童・生徒の理解を

教師の力量や言動は、直接、児童・生徒に反映し、人格の形成に大きな影響を与えるものである。

児童・生徒の姿は、教師の姿そのものである。自らを磨く者のみが、人の子の師となる資格を有する。

岡崎の教師は、昨今の教育の実情を厳粛に受け止め、学校教育の目標と学習指導要領の趣旨に則り、各々教育者としての使命を自覚し、校長の指導のもと、一致協力して児童・生徒の育成に努めたい。さらに、父母の心をこころとして、ひたすら子ども達のすこやかな成長に思いをいたし、児童・生徒はもとより、父母ならびに地域社会の人々の信頼と期待にこたえなければならない。

指導の重点

1、学級の児童・生徒一人ひとりの理解に努める。

2、できる喜び、わかる楽しさを知る学習の展開に努める。

3、善しあしのけじめをつけ、自らを律することのできる児童・生徒の育成に努める。

鈴村正弘教育長勇退 後任に横井 滋先生

鈴村正弘先生が、去る三月末日をもって勇退された。

先生は、岡崎師範学校卒業後、昭和十一年、笹戸尋常高等小学校訓導となり、二十三年には弱冠三十一歳で葵中学校長、その後、県教委学校教育課指導主事、同教職員課主事、城北中学校長を経て、四十七年十月、岡崎市教育長に就任し、通算九年四か月にわたり教育長の重責を担われた。

学校教育はもとより、広く教育行政に卓越した手腕を発揮された数々の業績は図り知れない。

後任には、前城北中学校長横井滋先生が就任された。

【寄贈刊行物・資料等】

◆広小三余 広幡小学校

◆あらと 嶋田 稔

◆岡崎市のトンボ 矢作中学 浅井稔・鈴木栄二

◆ほそかわ 細川小学校

◆折り折りの記 城南小学校

■明日の岡崎の教育を担う新任教師一三四名

〔小学校〕 九四名

▼梅園小＝藤井隆弘・鈴木 明・浅井真理子・水沢浩子・梅村郁子▼根石小＝杉山孝弘・鈴木千恵子▼男川小＝荻野卓寛・成田健治・小林静也・永井典子▼美合小＝蔭山裕子・都築裕子・大橋智恵子▼緑丘小＝畔柳朋典・内田紀詞子・藤城稔子▼羽根小＝杉浦宏一・渡辺真己子・近藤美佐子・小島嘉代▼岡崎小＝内田謙介・伊藤龍男・神谷敦子・原田典代・中川典子▼六名小＝赤崎晴彦・畔柳光則・加藤恒夫・島田繁直▼三島小＝鈴木稔雪・鈴木恵子・山本桂子▼田中正彰・太田 享・佐々木人美▼連尺小＝小久保道広・小林勝哲・八田敏公▼広幡小＝山中 武・太田末也・原嶋麻規子・黒川素子▼井田小＝山本照司・水越元彦・前川忠男・野本紀子▼福岡小＝大柿峰樹・藤井達也▼竜谷小＝薮田正隆▼藤川小＝倉橋敬宣・大村浩子・山本正子▼山中小＝鈴木智子▼本宿小＝今井孝悦・杉山文子・早川恵子▼常磐小＝伊藤加奈子・内田真奈美・斉藤妙子▼恵田小＝二橋慶子▼細川小＝杉浦正光・石原康子・長神ゆかり・菅沼和子▼岩津小＝佐々木浩一・柴田周子▼大樹寺小＝木村公治・蜂須賀渉・彦坂はるみ・笠井恵美子▼大門小＝加藤勝巳・沢田憲正・堀之内理恵子・杉原恵美子▼矢東小＝小島英樹・新実克之・高津幸臣▼矢北小＝中野信昭・横井学・二村昌子▼矢南小＝三ッ井直子・芳原靖恵・近藤恵美子▼六北小＝小川規博・森下成樹・藤田由美・朝倉正子▼六南小＝星野俊明・小林洋子▼城南小＝手嶋千治・鈴木快枝・山本若子・菰田泰可

〔中学校〕 四〇名

▼甲山中＝長坂洋人・彦坂寿子・十河幸代▼美川中＝内田憲郎・平山雄二・小谷良子▼南中＝藤井美雄・永田雅彦・深見典子・柴田裕子▼竜海中＝太田一弘・織田妃字子・伊藤淑乃▼葵中＝木村正信・倉嶋巧治・倉地 均・田中里美▼城北中＝山本満夫・畔柳とも子・竹内千晶▼福岡中＝水野久美▼東海中＝柴田雅己・佐野圭右・梅林明美▼河合中＝平井義朗▼常磐中＝高須亮平・鈴木康子▼岩津中＝倉橋孝光・米村 進・坂田裕史・村松康子▼矢作中＝堺 正司・都築和夫・壁谷雄二▼六中＝羽向智洋・近藤嗣郎・中西幸子▼矢北中＝川辺みどり・渡辺博子・上野直子

■意欲みなぎる新任教師の集い

本年四月一日から岡崎市の教師となる人たち一二六名が、三月二十五日から三日間、少年自然の家で研修をした。主な日程と内容は次のようである。

〔第一日〕三月二十五日

▽講話〈内田松夫校長〉▽講座〈浅井千代子校長〉▽実技研修〈ひらがな・数字の書き方、板書のしかた〉▽講座〈山浦昭雄先生〉

〔第二日〕三月二十六日

▽講座〈畔柳吉朗先生〉▽講座〈岸田達夫校長〉▽実技研修〈集団行動の訓練〉▽体験発表▽実技研修〈朗読のしかた〉▽野外活動〈オリエンテーリング〉▽実技研修〈孔版のしかた〉

〔第三日〕三月二十七日

▽講座〈県教委主査中村巽先生〉▽講座〈鈴木依治校長〉

駅長 一瀬嘉吉の碑

所在地—岡崎市明大寺町

名鉄東岡崎駅西にある竜海院の山門をくぐり抜けた左手に、大小数基の石碑が立ち並んでいる。これらは主に江戸末期より明治末期にかけて地域の産業や文化に貢献した人々の業績を記念して建てられたものである。

その中の一つに一瀬嘉吉の碑がある。趣意文には「君肥前旧諫早藩奉職於鉄道為岡崎駅長八年、明治三十八年二月九日死有志者課建立比碑、岡崎駅前運送組合中」とある。

明治二十一年、岡崎停車場が市街地から南へ四キロの地点に竣工し、地元民の驚異の眼で見送る中を岡蒸気が走った。

市街地から遠く離れていたため、岡崎町と岡崎停車場を結ぶ馬車鉄道を敷設する案が浮かび、明治三十一年、荷物運送業者らの強い要望もあって岡崎馬車鉄道株式会社が設立された。そして翌年一月、停車場・明大寺間が開通し、次いで殿橋へと伸びていった。

このような時に岡崎駅長であったのが一瀬嘉吉である。

・題字　岡崎市長　中根鎮夫
・タイトルバック　矢作中　早川正春
・カット　岩津中　野田光宏

この本を

○味のある言葉	宇野　信夫
講談社	1,200円
○父親とは何か	佐々木孝次
講談社	420円
○原爆に夫を奪われて	神田三亀男
岩波書店	380円
○子どもとことば	岡本　夏木
岩波書店	380円
○母性社会日本の病理	河合　隼雄
中央公論	1,200円
○大地震	グループ915
プレジデント社	950円
○ドラマが成り立つとき	木下　順二
岩波書店	1,900円
○獅子の教育	木村尚三郎
講談社	680円
○悪の管理学	川上　哲治
光文社	600円
○値段の風俗史	週刊朝日編
朝日新聞社	1,800円

オアシス

大きなリュックを荷台につけ、矢作川上流から下流までを生徒五人と二泊三日のサイクリング探訪したことが懐しく思い出される。

今月号から「ふるさとの山河」に矢作川が十二回にわたって連載される。母なる川を日々の生活の中で、もう一度とらえなおしてみたい。

四月三日、小学校の入学式。緊張ぎみの母親に対し、真新しい帽子と服、あどけない顔と澄んだ瞳。全く、ピカピカの一年生の入学である。

この子等を見ていると、なぜか心が洗われるような気がする。不思議なものである。

入学児母をはなれて列にあり　静子

あすは入学式・始業式。

新しい先生、友だちへの期待と不安に満ちた瞳にまた逢える。

新鮮な瞳の輝きを、持続させるのも、曇らせるのもわれわれ教師の気持ちと努力次第。今年こそ後悔することのない一年にしなければ。

入学の子の顔に大人びし　虚子

すばらしい徳川時代の礎が、松平の山里から多くの人の血と忍耐の中で培い蓄わえられた。当時、この城山で百年後を考えていたか知る由もないが時は流れた。今も着実に時を刻んでいる。

子ども達の成長がそのまま時代を築いていることを思う時、われわれのになっている責任は重い。新たな決意が湧く。